

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

4

私には三人の恩師がいます



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやじマンガ同人誌

つ新つれづれ草

マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年



おやじマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきたそして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料

日時：10月20日（金）～10月29日（日）
午前9時より午後9時まで（最終日は午後5時まで）

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新富線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東武メトロ有明門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





4、私には三人の恩師がいます

世間知らずの私が、今まで生きて来ることが出来たのは、三人の方が支えて下さったおかげです。

●吉田大象先生のこと

彫刻家

1920年 東京都文京区生まれ

1943年 東京藝術大学彫刻科卒業 新制作展初入選

1960年 新制作協会 会員推挙

1963年 上野学園ホール壁面にレリーフ制作設置

1980年 鳥取市文化センターホールに「早春像」設置

1983年 東郷中学校（鳥取）に立像制作設置

1985年 鳥取県わかとり国体メダル原型制作

1986年 個展（鳥取大学退官記念） 鳥取大丸美術画廊

1988年 個展 ギャラリーせいほう

2008年 個展 上野の森美術館

2009年12月2日逝去 享年89歳



吉田大象「足跡」
（ブロンズ像）鳥
取市文化ホール中
庭に展示

私が始めて吉田大象先生に会ったのは、幼稚園を卒園して小学校に入学する間の春休みのことでした。

武蔵野音楽大学付属幼稚園に一年間通いました。担任の先生は吉田文子先生で、人見知りの内向的な幼児だった私に優しく接してくださいました。

卒園した直後、吉田先生が自宅の近所の公団住宅に引っ越して来たことを知り、幼稚園の友達数人で先生の新居を訪ねました。その時にお会いしたのが、ご主人の大象先生でした。

突然訪ねて来た子ども達を、ご夫婦は優しさ一杯で受け入れて下さいました。

その心地よさに味を占め、小学生になった後も私はひとりで先生のお宅を訪ねるようになりました。

先生の部屋に飾られている塑像や作り掛けの作品に触れて、彫刻という存在を初めて知りました。大象先生は、何も分らない少年の私に、「彫刻とは、何もない所に粘土などを使って形を作り上げていくのでは無い、空間に既にあるデザインを色々な素材を使って、誰でも見た



1985年
鳥取県わかとり国体メダル原型制作

り感じたり出来るようにするものだよ」と教えて下さいました。

幼い私は、先生には作る前から、出来上がった彫刻が見えているのだと思いました。

小学生、中学生の間は、私の気が向くと先生のお宅に遊びに行く様な関係が続きました。

父は大学で精密機械科の教授をしており、2人の兄も理科系の学科が得意で、父は私にも理科系の大学に進むことを希望していました。

しかし私は、高校生になる頃には、マンガを描くことに夢中になっており、父の望む方向とは逆の方を見るようになっていました。

母は心配して、理科系の大学に行かなくても、せめて美術系の大学に進んで欲しいと、大象先生に相談してくれた様です。

私が将来どの進路を選ぶか分からないが、「基礎を勉強していて損は無い」と、大象先生の勧めで、高校一年から三年間、週に一回石膏像のデッサン

を大象先生に教えて頂きました。

これが、その後マンガ家としてデザイナーとして生きていく、財産になりました。

2008年11月、上野の森美術館で開催された個展で奥様の文子先生にお会いすることが出来ました。大象先生にはお会いできませんでしたが、そこに展示されていた作品は、幼稚園を卒園してすぐに伺った公団住宅のご自宅にあった、塑像と変わることとは全く無く、先生が一生見て作り続けてきた、自信に溢れた作品群でした。

「石膏像をよく見なさい、よく見て、よく見て、そして見て、見えた物を、自分を信じて、思う通りに描きなさい」

先生が教えて下さいました。

●あさのりじ先生のこと

マンガ家

1938年3月5日生まれ、愛知県出身。
少年時代の大半を中国の旧満州で過ごし、東京学芸大学美術学科に在学中から、

雑誌「少年」に漫画や科学系のイラストを発表。代表作『発明ソン太』『光速エスパー』など。

2000年11月9日逝去 享年62歳

発明ソン太（マンガシヨップ発行）



光速エスパー（マンガシヨップ発行）

私が始めてあさのりじ先生にお会いしたのは、中学二年になってすぐのことでした。

中学生になると英語の授業が始まりました。中学一年の一学期中間試験の後、英語の成績が赤点だったので、母は担任の先生に学校に呼び出されました。

母はすぐに、ご自宅で個人授業をしているおじいさんの先生を見つけてくれ、私は週に一度そのおじいさんの家に英語を教えてもらいに通いました。一年生の終わりに、先生は高齢を理由に英語の個人授業をやめることになり、母はすぐに次の先生を探して来ました。今度は若い男の先生で学校の近くで学習塾を開いていました。

その塾に行くのを決める前に、塾を訪ね先生に会いました。その時に私がマンガを描いていると言うと、先生は親友に売れないマンガ家がいるから、会いたければ紹介するぞ言われ、私は原稿を持ってそのマンガ家を訪ねました。

その時、お尋ねしたのがあさのりじ先生でした。結局その学習塾に行くことはありませんでした。

あさの先生は、西武線の桜台と江古田の間にある小さなマンションに住んでいました。

友達の塾教師の紹介だったといえ、中学生の私の描いたマンガをとて丁寧に読んでくれました。そして「キミはマンガ家になりたいのですか」と聞かれたので私は「ハイ」と答えました。「まずはしっかりと勉強して卒業しなさい。その上でもう一度マンガ家になりたいか、考えればよい」と諭すように話してくれました。

私がお宅にいる間に、小学生が訪ねてきました。カラーで丁寧に描かれた「光速エスパー」の色紙を子どもたちに渡していました。「近所の子どもがサインが欲しいと来るのでね」と、ひとつひとつ丁寧な対応をしていたのが印象的でした。

とても真面目で誠実な方だという印象でした。あさのりじ先生のマンガが大好きになりました。

実は、雑誌「少年」で連載していた「発明ソング太」は、好きなマンガでしたがそれ以上ではなく、新しく始まった「光速エスパー」は、東芝のイメージキャラクターでテレビドラマも始まり、なんだか宣伝のために描いている様で、私の中では評価が低かったです。

1カ月位後に、あさの先生から電話を頂きました。締め切りに間に合わないので、マンガの手伝いに来て欲しいとのことでした。翌日、学校が終わってから私は勇んで先生のお宅を訪ねました。「光速エスパー」の原稿で、コマ割りとフキダシが鉛筆で描いてあるだけの状態でした。雑誌「少年」の編集者と思われる人が、下書きもほとんど描いてない原稿からセリフのネームを書き取って帰って行きました。

私がお手伝い出来ることは、ワク線のスミ入れをすること、ベタを塗ること、出来上がった原稿に消しゴムを掛けることぐらいです。私は先生の

指示でワク線のスミ入れから始めました。先生は、原稿用紙を部屋いっぱいに広げて置いて、あっちのコマ、こっちのコマとバラバラに絵を描いてはベタを塗る場所にバツ印を描いて、私に渡してくれました。私は追いかけるようにベタを塗っていきますが、すぐに追いついてしまいます。すると先生は、下書きもなにも描いてない紙の白い部分に丸を描いて「ここにベタを塗っておいて」と指示をしてくれました。夜9時を過ぎる頃には私に出来ることは無くなってしまうました。先生は、この後は大丈夫だからと、中学生の私は帰されました。

翌月、「少年」の発売日に本屋に走りました。「光速エスパー」はちゃんと載っていて、私がベタだけを塗って帰ってきた場所は、近景の茂みになっていたり、建物の影になっていました。下書きも無かったのに、先生には完成した絵が見えていたのだと、中学生の私はプロのマンガ家のすごさを

思い知らされました。

次に先生のお会いしたのは、高校生になった時でした。目黒のマンションに引っ越したことをお聞きして、お訪ねしました。新しいマンションは、日当たりの良い坂の中腹に建つ、白い高層マンションで、私の目には、輝いて見えました。私は先生に「高校生になりました。マンガ家になりたいと思っています」と伝えました。

その後、締め切りに間に合わなくなりカンズメになると、先生から電話をいただきお手伝いに伺いました。講談社の裏のなんとかビルや小学館の裏のなんとか寮という旅館の様な所でした。

カンズメになっても先生は焦る様子も見せずに、「締め切りなんて、遅れたってたいした事じゃないんだ。地球は壊れないからね。自分の出来る最高の物を読者に届けること。作家にとって、これが重要なことだよ」おっしゃっていました。

高校を卒業して私はマンガ家としてデビューし

たり、少年チャンピオンで連載したりと、十年以上経った後に、「スタジオ・オズ」という名称で、アニメのライターと編集者のグループと私とあさの先生の三者と一緒に、神楽坂のマンションを借りて仕事をしたことがあります。

私は小学館の「てれびくん」で「ガッチャマン」を連載していました。あさの先生は原稿用紙を床に並べて、本人は寝っ転がりながら、手作りおもちゃの単行本の仕事をされていました。

あの中学生の時に、始めて先生のお手伝いをした日から十数年、同じ部屋で仕事が出来た1年間には忘れることが出来ない大切な時間になりました。

その後、仕事がデザイナー中心になり、編集プロダクションを経営する様になっても、先生は最後まで、私の愚痴を聞いてくれる存在でいてくれました。

●杉山義法先生のこと

脚本家

杉山義法（すぎやまぎほつ） 1932年1月17日
新潟県で生まれる。

新潟県立新発田高等学校を経て、日本大学芸術学部映画学科卒業。

主なテレビ作品

文五捕物絵図（1967年～1968年、NHK）

天と地と（1969年、NHK大河ドラマ）

春の坂道（1971年、NHK大河ドラマ）

赤ひげ（1972年～1973年、NHK）

みちくさ（1974年のテレビドラマ）

妻たちの二・二六事件（1976年、NHK、全5回）

風見鶏（1977年10月～1978年4月、NHK）

K連続テレビ小説）

いのち燃ゆ（1981年4月～10月、NHK）

遠雷と怒涛と（1982年、NHK土曜ドラマ、

全3回）

よいいドン（1982年10月～1983年4月、NHK連続テレビ小説）

宮本武蔵（1984年4月～1985年3月、NHK新大型時代劇）

縦ノ木は残った（1990年、日本テレビ里見浩太郎時代劇スペシャル）

年末時代劇スペシャル（日本テレビ）

忠臣蔵（1985年） テレビ大賞特別賞

白虎隊（1986年） テレビ大賞優秀作品賞

田原坂（1987年）

五稜郭（1988年）

勝海舟（1990年）

源義経（1991年）

風林火山（1992年）

ドキュメント番組の脚本や舞台の脚本など、代表作をあげても切りがありません。

日本放送作家協会、脚本家連盟、各会員。

2004年8月3日逝去 享年72歳

私が始めて杉山義法先生にお会いしたのは、中学二年の二学期になってすぐのことでした。

週に一回英語を教えてもらっていた先生が高齢を理由にやめてしまい、母が次に探して来たのが、帰国子女の若い女性の杉山道子先生で、江古田の古いアパートに住んでいました。

玄関で靴を脱いで上がると、すぐに二階に続く階段があり、二階には3つドアがあつたと思います。一番億の部屋が杉山先生の部屋でした。あの有名なトキワ荘と同じ様な木造のアパートでした。ドアを入ると四畳半の部屋があり真ん中にこたつがドンと置いてあり、奥にテレビがあつたと思います。学校が終わって先生のお宅に付くと手塚アニメの始まる時間で、私のマンガ好きを理解して下さって、まず30分ジャングル大帝を見てから、英語の勉強を30分して帰ってくる感じでした。週一回英語の勉強をしに行くというより、テレビアニメを見る方が楽しみでした。

江古田のお宅に行くようになってすぐに気がついたので、四畳半の部屋の右側にある2帖程の小さな部屋には本棚にビッシリ本が置いてあり、その脇の小さな文机には太りぎみの大柄の男性が、その小さな空間にぴったりはまり込む様に座って、原稿を書いていました、

ご主人の杉山義法さんで、まだ駆け出しのシナリオライターでした。

英語の勉強が終わると義法さんもこたつに一緒に入って、私のマンガの話を聞いてくれました。「このマンガという物は、手塚治虫というマンガ家が作り出した表現方法で、世界中で日本にしか無い総合芸術だ」などと、自信満々に話しました。義法先生が手塚治虫の短編集の単行本を読んだ後には、この人は天才だ、この少ないページでこれだけの内容とストーリーを描ける作家は見たことがない、と絶賛してくれました。私は良き理解者を得たと有頂天でした。

杉山義法先生は、NHKの看板番組のシナリオライターに抜擢され、どんどん出世街道を駆け上がって行きました。

NHKのドラマ「文五捕物絵図」や『赤ひげ』では、各話ごとに違うシナリオライターが担当して、脚本家が競う合う様な形で作られました。杉山義法、倉本聰、佐々木守、石堂淑朗などその後一流の作家になる方が参加されていました。

杉山先生は、同じ原作でもシナリオライターが違っただけで、面白くもつまらなくもなると、実際に身をもって私に見せてくれました。もちろん杉山先生の担当した回はどのシナリオライターのものより面白くなっていました。

脚本と演出がどれだけ大切かを学びました。

その後、週刊少年チャンピオンで、10回連載のチャンスを得いた時に、私の中で何を描くかは決まっていますが、週刊誌のペースで毎週シナリオに落とし込んでいく時間と自信が無いと思い、テー

マとアイデアを先生に伝えて、先生に10回分のシナリオを書いて頂きました。出来上がった「負けずの大五」は、私の構想に杉山義法先生の脚本でみごとにドラマに仕上がっていました。初めての週刊誌の連載で、10回最後まで遅れずに描き続けられたのは先生のおかげです。

杉山先生ご夫妻には、結婚するときに仲人をやっていただきました。



杉山義法先生に脚本を書いていただいた「負けずの大五」、電子書籍で発売中！

世の中の事を何も知らない、ただマンガを描くことが好きなマンガ少年だった私が、この歳になるまで生きてこられたのは、この三人の恩師が、いろいろな角度で私を、心を、支えて下さったおかげです。